

*高度成長を可能にさせた韓国型経済システム

→1990年代の変化

①強い成長志向をもつ国家による5カ年計画・選択的産業政策→選択的産業政策の放棄

②政府に統制され産業発展という目的に奉仕した金融システム→金融の自由化・国際化、対外借入の自由化

③高度成長と重化学工業化を担った財閥という企業システム →直接金融の拡大、政府規制緩和・拡大志向

→90年代中盤のこの変化により、脆弱な監督体制の下での金融機関の過剰借入と、政府の統制から抜け出した財閥の過剰投資・過剰多角化が進行し、危機の引き金となった。

2. 金大中政権の経済政策

(1) 経済危機克服のための4大課題

・金融改革：BIS基準の厳守・5銀行清算・2銀行海外売却・大型合併

・財閥改革：負債比率を99年末に200%以下に、ビッグディール・ワークアウト

・労働改革：労働市場の柔軟化・整理解雇制の導入
・公共部門改革

(2) DJnomicsの思想的背景 大韓民国政府『国民と共に明日を開く』1998年。

：民主主義と市場経済の並行発展

①IMFのコンディショナリティを受け、貿易・投資・為替取引・資本取引の自由化。

：市場経済重視の思想。

②ドイツの秩序自由主義の言及：

李鎮淳（現 KDI 院長）『経済改革論』比峰出版社、1995年。

・1998年1月に「労使政委員会」の出帆。

労組も含めた社会的合意機構の組織化。労組の数度の離脱にもかかわらず、労使政委の法制度化に発展。

*金大中政権の経済思想は、上記の市場経済重視の側面と社会的合意主義重視の二つの側面からなる。

韓国の経済発展と儒教理念

キム
金
ジュ
朱

チャン ナム
昌 男 (韓国・東亜大学)
スン ファン
星 煥 (韓国・建国大学)

20世紀に入って韓国は、政治・経済・社会のあらゆる分野において急速な変化と再編成を経験してきた。韓国は、1910年に大韓帝国の没落と共に日本の植民地統治下に入った。それによって、これまで数千年にわたって維持してきた伝統社会が近代化され、かつ近代化過程の相当部分を日本から受けた。また、開放の後、韓国は、米軍政下のもとで世界資本主義体制に編入され、資本主義と民主主義の制度を導入してきた。特に、1960年代に入って韓国は、世界資本主義の分業体系へ積極的に参加することによって、海外貿易の拡大とそれによる急速な経済成長を実現することができた。

かかる過程において、韓国は、西洋の制度を積極的に導入しただけでなく、西洋化された知識人と社会改革家たちによって西洋文化が速やかに韓国社会に伝播された。しかし、かかる西洋文化の急速な流入と波及にもかかわらず、現在の韓国社会では、政治・経済・社会など、あらゆる分野において伝統的な儒教の理念と価値観が残っており、その影響力は未だに大きい。そのために、社会組織のみならず政治形態や経済行為、そして韓国人の価値観などを説明する場合でも儒教的伝統の重要性が常に強調されるのである。

本報告は、韓国の社会全般にわたる発展過程の中で、

経済発展に対する儒教の役割に関して論議するものである。20世紀前半期の韓国は、植民統治、開放、韓国戦争による混乱や復旧などによって、経済は足踏み状態であった。1960年代初期から始まった韓国の経済成長率は、1960～1993年間に年率9.7%に達し、世界の中等所得国平均4.8%の2倍も超える高率を記録した。また、このように高い経済成長にもかかわらず、韓国経済は、経済発展の初期から所得分配がかなり平等化してきたという特徴を持っていた。韓国の目覚ましい経済発展を可能にしたのは、高い国内貯蓄率と進学率、そして政府の効率的な政策運営などの要因があったからである。

しかし、これらの諸要因が如何にして韓国経済の発展過程に現れたか。この問題を説明するためには、何よりも韓国の儒教的伝統と理念を理解せねばならない。すなわち、韓国の経済発展の初期状況（低い家計所得、大きなリスクと不確実性の蔓延、金融的抑圧によるマイナスの実質利子率など）の中から高い貯蓄が可能であった原因は、儒教の「節用精神」から探すことができよう。また、低い家計所得と期待賃金のもとでも学問を重視する儒教の伝統的習慣からあらわれる高い進学率、家族主義から出発した社会共同体精神に基づく平等な所得分配、民本主義にもとづいた政府とテクノクラートならびに、あらゆる段階の競争的試験を通じて選抜されたエリート官僚によって主導される経済政策などは、韓国の伝統文化である儒教でなければ説明しきれない要素である。

一方、韓国経済は、東アジアの儒教国がもつ上述の共通の特徴以外にも様々な特徴を持っている。歴史的にみた場合、朝鮮朝の儒教は、とくに現代教育に大きな影響を及ぼした。朱子学に基礎をおいた「節義派」によって発展させられてきた朝鮮朝の儒教は、人間の内的「性情」と道徳的価値の問題を重視し、特に教育の重要性を強調した。教育を受けた朝鮮朝の儒学者集団がテクノクラートの排出と教育の機能を担当してきたのである。

この儒学者集団は、いまなお韓国社会に残っており、大学と言論が教育を担当し、官僚を輩出する貯水池の

役割を担当している。したがって、韓国の中で教育は、社会的身分上昇の主要な方法として驚くほどの教育熱を呼び起こしてきた。当然のことながら高い教育熱の結果として、韓国経済は、労働集約的産業から資本集約的産業へ、また技術集約的産業へと移行する産業構造の転換に大きく寄与している。しかし、精神的世界を強調してきた朝鮮朝儒教の影響を受けて、韓国の教育は、伝統的に文科を重視する一方、経営や工学系のような実用的学問はそれほど重視しなかった。そのために、今日の韓国は、文科系が大きな比重を占め、投資的な観点からみて非効率的な教育体系にもなっている。

一方、朝鮮朝の儒教は、人間の本性を追求し、それに基づく行動規範として「礼学」が発展した。社会制度の厳格化と思想的権威主義を強調する礼学の実践は、「朱子家礼」を強調するようになった。最近、韓国社会で行われる礼式の盛況は、自己誇示の形態に変質し、虚礼虚飾が社会的に蔓延する傾向をみせている。このような虚礼と過消費によって、最近の韓国は、貯蓄率が他のアジア諸国に比べて低く、かつ国内投資率にも満たない状況になっている。したがって、経済成長のための投資の一部は、外国資本に依存せざるを得ず、外債が累積した結果、今回の経済危機に直面したのである。

朝鮮朝の節義派たちは、儒教の正統的精神に強く、孔孟思想が朝鮮王朝の理念と社会制度の核心をなしてきた。閉鎖的社会内で限定された経済的利益配分のために朝鮮朝の儒教は、厳格な身分制度と孔孟の「差別愛主義」に基づく長子相続の世襲制度を強調してきた。かかる理念と習慣が、現代韓国社会に継承されたために、社会全体の共同意識は、儒教圏国家の中で最も弱い国となっている。特に現代韓国社会は、西洋の個人主義的文化と儒教の家族主義とが結合されながら、家族利己主義が強化される傾向さえ現れている。また、長子相続の世襲制度は、韓国経済のあらゆる分野に根をおろしており、財閥という独特な企業組織を形成するようにもなった。

欧米社会は、個人主義と社会契約という理念・価値観に基づいた市場経済制度を、市民社会によって、「下

から」発展させてきた。これとは対照的に、韓国の市場経済制度は、経済発展のためには市場経済制度以外に解決の方途がないとする政府によって、「上から」導入された制度である。したがって、市場機能が円滑に働かないか、あるいは国家の最優先目標が経済発展以外のもの（政治や安保など）へと移動した場合、韓国の市場経済は、政府の介入を簡単に認めざるを得ないという脆弱性をもっている。また、市場経済制度の導入によって政府と企業の癒着が必然的に発生し、癒着過程では縁故主義が登場せざるを得ないという特徴も持っている。

したがって、韓国経済発展に直・間接的に影響を与えてきた儒教が、韓国の先進国化に肯定的な役割を果たすためには、次のような選択に迫られよう。すなわち、韓国の儒教は、「闢異端論」に基づく閉鎖的儒教から脱皮して新しい変化に適応しながら韓国社会を牽引する新しい儒教として「温故而知新」の儒教へと着替えるか、さもなければ、韓国の伝統的儒教を前近代的な遺物として歴史の舞台から一掃し、韓国社会を西洋的個人主義と合理性の理念や価値観にゆだねるのか、のどちらかを選択しなければならない状況に直面している。